

佳作

みえなうプレゼント

福島県 若松商業高等学校一年 佐瀬 ひな子

私には、去年亡くなってしまった大好きな祖父がいました。祖父は、いつも無口で笑ってくれる時は、ほとんどありませんでした。しかし、私が小さい頃から一緒に遊んでくれた優しい人でした。そんな祖父が残してくれた、優しい心をここに記しておきたいと思います。

祖父は、私の両親の仕事である「あんこ屋」の会長でした。私の両親は仕事熱心な人で、私には兄弟がいないので、いつも遊ぶ時は一人でした。そんな私と遊ぶ為に、祖父は会社に顔を出してくれました。遊び相手がいなかった私にとって、祖父は大切な人であり、まるで友達のような存在でした。私と遊んでいる時の、祖父の笑顔が今でも忘れられません。祖父が帰ってしまう時の、お見送りは私の日課でした。いつも、バイバイの時のハイタッチには、元気をもらっていました。祖父は、いつも私の手をつないで、一緒に歩いてくれる本当に優しい人でした。

誰もが知っている東日本大震災の時も、支えてくれた

のは祖父でした。私は、当時小学四年生でした。学校で初めての恐い体験をした私は、夜お腹が痛くなってしまいました。ご飯ものどを通らず、ただ苦しむだけの私に両親も困っていました。そんな時、電話をくれたのは祖父でした。祖父は、私の父に

「ぬるま湯を飲ませろ。」

ただそれだけを言ったそうです。ぬるま湯を飲んだ私は、すぐに痛みから解放されたのです。その時は、本当におどろきましたし、祖父の偉大さを感じる事ができたのです。あの時、祖父の言葉が私を救ってくれたのです。

祖父は、私が生まれる前から病気をもっていました。週に三回、病院に通っていました。病院から帰ってきて疲れているはずなのに、私の前では元気に振るまわってくれました。幼い私は、祖父の病気の辛さや大変さを、何一つ分かっていませんでした。やっと気付いた時には、もう遅い気がしました。祖父は、その病気が原因で足を切ったのです。もう、私を車に乗せて連れて行ってくれることも出来ず、一緒に歩くことすら出来なくなりました。祖父は、薬で毎日少しずつ記憶がなくなっていくきました。私はいつからか、そんな祖父が恐くなくなってしまう、お見舞いに行っても、話すことは減多になくなってしまいました。それでも、祖父は父に笑顔で「ひな子を車で色々な所に、連れて行ってあげたい。」そう言ってくれていたのです。私は、祖父が亡くなる前

日に祖父にプリンをあげました。久しぶりに間近にみた祖父は、とてもやせていて、私が知らない人のように見えませんでした。帰る時、祖父は今までに無いくらいニコニコの笑顔で、私を見送ってくれました。その優しい笑顔をみれて、私は安心していたのかもしれませんが。祖父は、次の日の朝に旅立ちました。今でも、あの朝は忘れることが出来ません。祖父は、温かい心と優しい笑顔を残して、この世を旅立ちました。

私は今、祖父に会えるなら伝えたい事が、沢山あります。でも、それは叶わないので、この作文が祖父に届くことを願います。

私の今の夢は、祖父が守り続けてきた「あんこ屋」を継ぐことです。父には反対されていますが、私は私のやりたいことをやりたいです。祖父が守り続けてきた伝統を、父の代で終わらせたくはありません。私は今の社会の厳しさを知りませんし、商売がどんなに大変なのかも分かりません。しかし、祖父や父が守り続けてきたものを、守りたい気持ちは、誰にも負けません。今は、この気持ちは誰にも分かってもらえていません。いつか、祖父や父が笑顔で支えてもらえるような大人になりたいと思います。

人は、大切な人が亡くなってしまったり、病気になったり、怪我をしてから本当の大切さに気付くのだと思います。生きている時には気付かない、温かさ、優しさ、

強さ、ありがたさ。祖父は気付かない間に、私に沢山の目にみえないプレゼントを残してくれたのです。まだ、開けていないプレゼントは沢山あるはず。そのプレゼントは、私これから先、生きていく上で大切な時に送られてくるでしょう。祖父は、私の心の中にずっと生きています。時に、そのプレゼントで叱ってくれたり、ほめたりしてくれると思います。祖父が残してくれたプレゼントと、大切な人達と共に私はこれからも生きていきます。最後に、「じいちゃん、私の思いは届いていますか。本当にありがとうございます。」今、天国で祖父が笑ってくれていることを願います。